不夜都市東京。渋谷109前スクランブル交差点の中央で、彼女は独り立っていた。
横断歩道を通り過ぎる人々は、彼女を気に留める様子もなく、足早に駅の構内へと走っていく。
ふと彼女はネオンに霞む偽りの満月を仰いだ。
彼女の脳裏に込み上げたものは、懐かしき想い出。遥か幼き頃夢見たあの日の誓い。
一度も忘れたことはない。長い時間の中でその決意が揺らいだこともある。疑ったこともある。けれど長い時を経てそれは確信に変わって。だから彼女はいつもその誓いを胸に生きてきた。
彼女は右腕を高く掲げ、月を衝く。腕に繋がる鎖が、しゃらんと音を立てた。澄んだ鉄の音が、喧騒を無視して響き渡る。水を打った波紋の如く、周囲から音が消えた。
月が砕け、星が降る。光の雨をその身に受けて、小さき鬼は高らかに吼える。
始まりを告げるその言葉を！
「さぁ、お立会い！
鬼ヶ島へようこそ。これよりが、百鬼夜行の始まりだ！」

――0――

その日、都は雨が降っていた。道行く人は足早に家路を急ぎ、往来の人は少ない。朱雀大路といえども、天皇のおわす大内裏から最も離れた羅城門近くでは、賑やかさも華やかさも感じられない。並ぶ家々も粗末なつくりで、今にも倒れそうな始末である。暗雲に覆われた天気がより一層、その寂しさに拍車をかける。

そんな通りを一人の男が走っていた。粗末な麻の着物。上腕の袖は赤く滲んでいる。身分は低い出で立ちであった。他の者と違いを挙げるとするならば、その男は異様なまでに大きかった。

男は羅城門の下で一度足を止めた。

建設当時は朱色の艶やかな彩色が施され、絢爛な都が誇る立派な門であった羅城門であったが、中心部から外れた場所にあるため手入れがゆき届かず、百年の歳月の風雨によって見るも無残な姿に変貌していた。その風貌とこの地域の閑散とした寂しさから、この門には鬼が出るとまでの噂もある。

そんな門の下で、男はまだ生まれて間もない赤子を見つけた。

そして雨がやみ、男が去った後、捨てられた赤子の姿はなかった。

それから十数年後、羅城門はついに支柱が腐り落ち、倒壊してしまった。その内部から

腐り落ちた門と呼応するように、徐々に都は荒廃の一途を辿る。後世に景仰された天暦の治を行った村上天皇の死後、外戚を優遇する政治が始まると、火災、飢饉が重なり、暗黒時代を迎えることとなる。

時に西暦九六八年。物語はここから始まった。

「はい、これ頼まれてたやつ」
「いつもありがとうね。酒呑さんによろしく」
「いえいえー、じゃあ私はこれで」
「あ、今日とれたやつもってきな」
「うわぁ、おばさんありがと」
少女は、手渡された柿を見て目を輝かせた。傍らに抱えた荷物を落とさないように注意しながら器用にくるくると回りながら駆けて行く。
薄い桃色の着物にちょこんと包まれた少女は、朗らかな笑顔を浮かべて楽しそうに道を弾む。結んでいない少女の髪が、踊るように跳ねて波を描く。
走っていく少女の横手には田んぼが広がり、収穫の時期を迎えた稲が悩ましげに頭を揺

らしている。人々はその黄金の海に分け入り、豊穣の喜びを噛みしめながら、鎌を振るう。
少女のててて、という足音が聞こえると、屈んでいた農夫が顔を上げて手を振った。それに対して少女は後ろを向き、手を振り返しながら走っていく。

やがて田園地帯を抜けると散在していた住居が、集まり始め、街道をなす。がやがやとした喧騒。走っていく少女と同様に村人の顔も明るい。彼女は、自分の名を呼ぶ顔見知りにその都度律儀にあいさつを交わす。それでも足を止めることはない。
やがて、街道は山道に変わり、傾斜を増していく。ちっちと小鳥たちがさえずり、木々が揺れている。
木漏れ日が少女を照らすと、山吹色の髪が黄金色に輝いた。

「ただいまー」
「おう、おかえり萃香」
少女が声をかけた先には、箒を持った大男が境内の掃除をしている。
巨岩のような体躯に、苔むしたかのような体毛。身長も七尺（約二メートル）はあろうか。
ぎらつく瞳は、人を射ぬくほどの鋭さを誇り、とても仏に使える身ではないような強面をしていた。頭は禿げあがっているが、あごひげをたっぷりと蓄えた彼は、そのまま破戒

僧のように見えた。

彼の名は、酒呑（しゅてん）。
正確には、その呼び名も通称。本当の名を、彼は出家する時に捨てた。
十年前、羅城門で赤子を拾った男。それが今の酒呑である。

「ほら、ジジィ。頼まれもんだよ」
「済まないな。あぁそうだ、萃香、友達が……」
酒呑が言いかけたその時、飛び抜けに明るい声が境内に響いた。
「萃香ー」
「遊びに行こうぜー！」
寺の裏の山から、ひょっこりと子供たちが顔を出した。
「うん、今行くー！」
そして、萃香と呼ばれた少女――彼女こそが男の拾った赤子の成長した姿であった。
色素の薄い金の髪を棚引かせて、彼女は駆けだした。
「行ってきます！」